

芻出橋は新橋交差点の近く、鶴川に注ぐ塩込川(汐込川)が暗渠となる直前にかかる小さな橋である。橋の名前の由来については、『柏崎文庫』で「あく水(汚水)をはき出す処にて、はき出し橋の転か」と推測している。なお、現在の橋柱には「芻出橋」と書かれているが、資料中には跳出橋・羽出橋・はねで橋等の表記も見受けられる。

かつて芻出橋付近の道はそのまま鶴川の川岸になっており、子どもたちは道端に腰掛けて魚釣りに興じていた。この場所は釣りの名所として有名であり、昭和11年8月の越後タイムスは「川の盛り場跳出橋は、日中は子供の独壇場である。朝夕は釣師の数も相当見える…」と伝えている。

また芻出橋は、柏崎町の人が薪木や炭や野菜を買うために上条郷から売りに来る人を待ったので、事実上の市場であった。しかし鶴川の流れの影響で道が狭くなったり、車馬の往来が激しくなったりしたため、往来の邪魔になるということで取り締まりが

厳しくなり、次第に市場は廃れたという。

『新橋(柳橋2区)のあゆみ』では、長期間風雪に晒された感のある、石製の古い芻出橋の橋柱を見ることができる。また下の写真は、戦後の鶴川改修工事で撤去される前、昭和19年のものである。氾濫や大規模な改修により、鶴川周辺の風景は大きく変化してきた。この小さな芻出橋も例外ではない。



芻出橋(昭和19年7月の鶴川氾濫で道路が破損している)

●参考にした本
 柏崎(224 カ) 中村葉月・西巻三四郎 共編
 柏崎市史資料集 近現代篇 3 (224 K ヅ) 柏崎市

ソフィアだより190号に掲載した「石橋」の内容について、市内ご出身で筑波大学名誉教授の内山知也先生からお手紙をいただきました。その中で、芻出橋と石橋の関係や、かつての新橋付近の様子についてご教示いただきました。ここにその内容の抜粋をご紹介します。



上図は内山先生が描いた昔の芻出橋付近の図を模写したものです。

- この橋(石橋)は、上からは下を流れる川は路のはずれに行かないと見えない狭い橋でハネダシと言っていました。
- はねだしの下を流れる川は町の裏側を下り雨水を集めて流れるのと田から流れてくるのがあって、今も小魚が遡上してくるのが見えます。(上流で)
- 「芻出し橋」は町の下水が流れてくるところで、上流に錦魚養殖地があった。洪水になるとたくさんの錦魚が流れてくるので、子供たちが川口に待ち構えていた。
- 「石橋」はおそらく江戸時代の名称で、それが道路の拡張堅固化のために石造になり、大正頃にはセメントで固められ一見川がないようですが、下を流れる川は町の汚水、田の水、日石の水を流す川です。